

3. 瀬戸内海の主な石の史跡

名 称	特 徴
石の宝殿及び竜山石採石遺跡 (兵庫県高砂市)	生石神社の御神体は巨大な石造物で、裏手に切妻風の突起を後ろにして家を横たえたような形で横約 6.5m、高さ約 5.6m、奥行約 7.5m、重さ約 500t もある。これは「石の宝殿」と呼ばれ、奈良時代の「播磨国風土記」に「大石」と記されている。水面に浮かんでいるように見えるところから「浮石」ともいわれているが、多くの謎に包まれ、宮城県塩竈市御釜神社の「四口の神釜(よんくのしんかま)」、宮崎県高原町霧島東神社の「天之逆鉾(あまのさかほこ)」と並んで日本三奇の一つに数えられている。いつ、誰が、何のために作ったのか、不思議な石造物として訪れた人の目を驚かせている。 また、竜山の山中には竜山石の採石場が点在する。竜山石とは今から約 9000 万年前に形成された凝灰岩で、古墳時代から現在まで約 1700 年間採石され続けており、高品質で加工に適した石材として様々な石造物の製作に使われてきた。特に、古墳時代の大王の棺や江戸時代の建築材などに利用されるなど、竜山石の製品は、西日本各地に流通し、石の文化を伝えてきた。 江戸時代の天保 7 年(1836 年)に、姫路藩の命で景勝地として「観涛处」の三大字が崖面に掘られた。観涛处の上からは南方の海を見渡すことができる。 平成 26 年(2014 年)10 月 6 日に、「石の宝殿及び竜山石採石遺跡(いしのほうでん および たつやまいしさいせきいせき)」として、国の史跡に一括指定された (参照: 高砂市 HP)  石の宝殿 (生石神社のご神体)  竜山石採石遺跡  景勝地「観涛处」

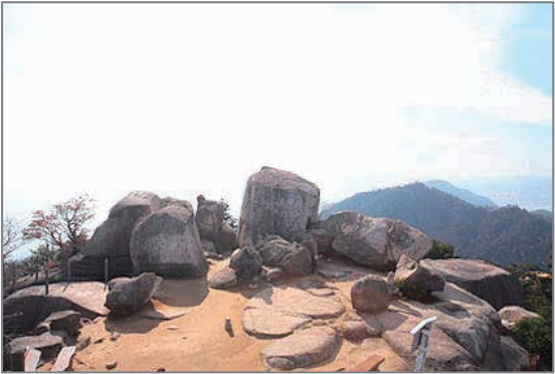
名 称	特 徴
五色塚古墳 (兵庫県神戸市)	五色塚古墳は4世紀後半に築造された3段築造の前方後円墳で、墳丘の大きさは全長 194m、前方部の幅 82.4m、高さ 13m、後円部の直径 125.5m、高さ 18.8m で、周濠を巡らしている。下段の斜面には小さな石を葺き、中段及び上段の斜面には大きな石を葺いている。中段及び上段の葺石の多くは分析の結果、淡路島の東海岸から運ばれたものであった。下段の葺石は、主に地元の礫を用いている。使用された石の総数は、223万個、総重量 2,784 トンと推定される。この他埋葬施設に用いられたと推定される石材に、徳島県産と判定された板状の石材を用いている。明石海峡を見下ろす場所に立地しており、海上交通と関りの深い有力者の墓と考えられている。古墳域は、大正 10 年（1921 年）に小壺古墳の古墳域と合わせて国の史跡に指定されている。 (参照：神戸市教育委員会文化財課 HP) 
古代大輪田泊の 石椋（いわくら） (兵庫県神戸市)	大輪田泊と呼ばれた兵庫の港は、奈良時代に行基が築造したと伝えられ、遣唐使船の寄港地や平清盛による日宋貿易の拠点となった。この巨石は昭和 27 年（1952 年）の新川運河の浚渫工事の際に発見され、平清盛が築いた経ヶ島の遺材ではないかと想像されていた。しかし平成 15 年（2003 年）、この巨石が発見された場所から北西約 250m の場所で、奈良時代後半から平安時代中頃の港湾施設と推測している遺構と建物の一部が発見されたことから、この巨石は古代の石椋の石材であったと推定される。(参照：神戸市 HP) 石椋：石を積み上げた防波堤や突堤の基礎等の港湾施設 経ヶ島：平安末期に清盛が風よけのため築いたとされる人工島 

名 称	特 徴
城山 (香川県坂出市)	城山には古代山城の遺跡があり、国指定の史跡となっている。また、城山の城跡は城山長者の伝説と結びついていて、坂出の昔話として語り伝えられている。 城山は朝鮮式山城とも神籠石とも呼ばれているが、今日では朝鮮式山城に類似する構造の城跡と考えられている。朝鮮式山城は7世紀後半頃の朝鮮半島の政治的緊張に伴い、日本国内の防御体制を整えるために築かれた城である。 このほか、山中にはホロソ石・マナイタ石と呼ばれる石製加工物が散在しているが、これらは城門の礎石ではないかと推測されている。ただし、ホロソ石一対とマナイタ石とで城門の礎石を組むと、その数が足りないことや、その発見場所が全く離れていたりすることなど不明な点が多く、破壊されたためではないかとか築造途中に放棄されたのではないかなど、諸説が考えられている。いまだ謎に包まれた遺跡である。 (参照：坂出市 HP) 城山のホロソ石
大坂城残石記念公園 (香川県土庄町)	戦国時代の終わり、冬・夏の陣で落城した大坂城を修築するために切り出されたが、使われることなく放置された約40個の残石を中心に大坂城残石記念公園が整備されている。公園内には、小豆島における石丁場、残石などに関わる写真や古文書のほかに、当時の石の運搬に使われた道具類や石工が使う用具類などが展示されている。また、当時の輸送方式などが分りやすく再現されているほか、石づくり体験などでもできる。 (参照：小豆島観光協会 HP) 大坂城残石記念公園

名 称	特 徴
池田の棧敷 (香川県小豆島町)	亀山八幡宮から 400m ほど西に離れた小高い丘に、石垣づくりの棧敷が築かれている。棧敷の規模は、長さは 80m、高さは約 18m、6～8 段の階段状になっている。石垣は、島内から安山岩、玄武岩、花崗岩などが集められ積み上げられたものである。 瀬戸内海に面して、自然の地形を巧みに利用した、石を野面積(のづらつみ)にした棧敷の傑作で、秋祭りの際、太鼓台や御輿、大練りなどを見物するために築かれたのではとされている。構築年代についての資料は見当たらないが、『亀山八幡宮奉懸当社御祭礼之図』から文化 9 年(1812 年)以前ではないかと推定される。(参照：小豆島観光協会 HP) 
石の民俗資料館 (香川県高松市)	牟礼・庵治の 400 年にわたって築き上げられた石の文化と歴史。石の民俗資料館では石工達の知恵と技術、優れた技能を伝えてくれる。 館内では、大正末期から昭和初期にかけての牟礼町における、石の切り出し、運搬、加工のそれぞれの風景を、等身大の人形を使ったジオラマでリアルに再現。また各工程で使用していた実物資料も約 1000 点展示しているが、これらの多くは陳列するだけでなく、実際に質感を感じてもらうため、手で触れることが可能となっている。 
女木島のオオテ (香川県高松市)	女木島(別名鬼ヶ島)の東浦集落の海岸線に築かれた讃岐岩類で築かれた防風防潮垣をオオテと呼んでいる。強風から家を守るために明治初期から昭和中期にかけて作られ、民家の石垣よりも高く(約 4m) 築かれていたが、高度経済成長以降、家の新築に伴い少しずつ景観が変わりつつある。 

名 称	特 徴
佐田岬半島の石造物群 （愛媛県伊方町）	佐田岬半島には、鎌倉時代中期から江戸時代にかけて、五輪塔・宝篋印塔・層塔などの石造物が1400点超確認されている。それらはすべて大分県、香川県、兵庫県などの地元以外の8種類の石材で、それぞれ各産地で作られ、瀬戸内海を通じて佐田岬半島に運ばれたものと考えられている。（参照：伊方町の石造物調査報告書Ⅱ）
浄土寺山の切り出し岩 （広島県尾道市）	尾道の繁栄は、嘉応元年（1169年）に備後国大田庄の年貢米積出港の公認港に定められてから始まり、江戸時代の寛文12年（1672年）に開かれた西廻り航路によって、尾道に北前船が寄港すると更に繁栄を極めた。北前船が、東北地方や北陸地方などの産物を運んできた後の、帰り荷として尾道の石材が積み込まれ、日本海沿岸に運ばれた。石材とともに尾道石工も各地に赴き、鳥居や灯籠をつくっていった。船底に石材を積むと船（千石船；北前船で使用されていた1000石以上の船）の安定にも一役買っていたという。石材の切り出し場としては、古くは市街地の背後、千光寺山や浄土寺山、対岸の向島であり、尾道は地質学的に花崗岩が多く、良質の石材にも恵まれていた。 （参照：尾道商業会議所記念館第9回企画展示-尾道と石工-）

名 称	特 徴
鞆の浦の雁木・常夜燈 (広島県福山市)	鞆港には、江戸期の港湾施設である常夜燈・波止（はと）・雁木（がんぎ）・焚場（たでば）・船番所跡の港湾施設 5 点セットが今も残っている。この 5 点セットが全て残っているのは全国でもここだけと言われている。 雁木は、潮の干満に関らず船着けができる石階段のことであり、最上段には船を係留するための船繋石（ふなつなぎいし）が並んでいる。また、常夜燈は安政 6 年（1859 年）に西町の人たちの寄進により設置された灯台で、江戸時代に作られた石造り常夜燈としては日本最大級のものである。雁木、波止、常夜燈は御影石を活用して造られた港湾施設である。 (参照：福山市 HP) 雁木 波止 常夜燈

名 称	特 徴
宮島・弥山 (広島県廿日市市)	宮島（厳島）の中央部にある標高 535 m の山で、古くからの信仰の対象になっている。天然記念物に指定されている「瀨山原始林」は、針葉樹林に南方系の植物が混在する森で、ヤマグルマなどの原始的な植物を自然の状態で見ることができる貴重な場所となっている。標高 400m 以上の所では、ツガやモミなどの針葉樹とアカガシやウラジロガシなどの常緑広葉樹が混じった混合林が見られる。中腹から麓にかけては、アカマツを主体にシリブカガシ・タイミンタチバナ・ミミズバイなど常緑広葉樹が多い森になっている。多様な植物相をもつ自然の森の美しさと、巨岩奇石（曼荼羅岩、干満岩、風吹岩、賽の河原、岩屋大師竜穴等）が点在する変化に富んだ景観、そして眼下に広がる瀬戸内海の多島美を見ることができる。 (参照：廿日市市 HP)  弥山山頂
石城山神籠石 (いわきさん こうごいし) (山口県光市)	瀬戸内海沿岸各地にある神籠石(古代山城)については、築造の歴史や目的がはっきりしておらず謎が多いことで知られている。 光市石城山にある神籠石は、光市と田布施町にまたがる標高 362m の石城山県立自然公園の中にある。高日ヶ峰、大峰、星ヶ峰、鶴ヶ峰、月ヶ峰の 5 峰を主峰として、その八合目付近を、土塁や門、水門などの遺構が取り巻いており、昭和 10 年（1935 年）に国指定史跡となっている。また山頂付近には、重要文化財に指定されている石城神社本殿が鎮座している。 (参照：光市 HP)  西水門

名 称	特 徴
二見夫婦岩 (山口県下関市)	二見夫婦岩は、山口県豊北と豊浦との境の、響灘を望む古くからの漁師町二見浦にある。 国道の脇の海岸そばに立つ夫婦岩は、神聖な岩として信仰され、二つの岩をつなぐしめ縄は、毎年1月2日に締め込み姿の男衆の手によって張り替えられる。響灘に夕日が沈む頃、岩と海と太陽があいまって作り出す風景は神秘的でおごそかな気持ちにさせられる場所である。(参照：下関市 HP) 
久賀の石風呂 (山口県周防大島)	石風呂とは、石室の中で柴等を燃やして石を焼き、医療の目的で蒸気浴あるいは熱気浴を行うための施設である。 久賀の石風呂は、石を積みあげた上に粘土を塗りこめ、内部の土間もたたきになっているもので、海水をかけた海藻を焼けた石室内に敷いて湯気をたてる方式で蒸気浴を行う。最大幅 5.4m、最大奥行 4.65m、高さ 2.55mの石積式蒸風呂で、西日本最古の石風呂といわれている。近隣の人々の湯治場として昭和初年まで利用されていた。 言い伝えによると、1180 年平重衡によって東大寺が焼失。後白河法皇の領土であった周防国から木材を調達するため、1186 年俊乗房重源上人が任命され下った。用材は山口県徳地より切りだされたが、その間、この地に巡錫の折、石風呂を造ったといわれている。久賀の石風呂は西日本最大、最古のもので、昭和 33 年（1958 年）文部省の文化財重要有形民俗資料に指定された。 (参照：周防大島町 HP) 
下請川南遺跡の石鍋 (山口県宇部市)	下請川南遺跡は国内で 2 番目に発見された石鍋製造跡である。滑石をノミで削って作った石鍋は西日本の中世の遺跡からよく出土するが、下請川南遺跡ではその未完成品や破損品が多数出土しており、ここで石から削り出す加工が行われていたと考えられる。 

名 称	特 徴
住吉神社石造燈台 (山口県防府市)	住吉神社は、萩藩の水軍の本拠地である御舟倉へ続く入川（いりかわ）の河口に、海上交通の安全を祈願するために、正徳5年(1715年)に創建された。 石造燈台は、その境内に文久3年(1863年)に建立されたもので、基壇 389cm×384cm、高さ 727cm におよぶ灯籠（とうろう）型の燈台である。竿（さお）の部分にあたる石積みには、建立にたずさわった世話人や石工、拠出者などの銘が刻まれている。 萩城に往来する表玄関の海上交通の安全に寄与してきた交通遺跡であり、史跡萩往還の関連遺跡として指定されている。 (参照：防府市 HP) 
常山城跡 (岡山県岡山市・玉野市)	玉野市と岡山市とにまたがる標高 307m の美しい山で、古く内海の護りとしての山城が築かれていたという。 県下有数の山城で、天正3年（1575年）の児島常山合戦で、城主上野隆徳が毛利勢に対して孤軍奮戦し、妻鶴姫が女房 34 人と共に敵陣に切り込んだ。この女軍奮戦は全国的にその例がなく、歴史物語にもとりあげられている。 現在でも、合戦時に兵士千人が隠れたといわれる千人岩や、城主上野隆徳が岩の上で切腹したと言われる腹切岩、華々しく最期をとげた女軍が眠る 34 柱の石碑のほか、石畳の旧路、底無し井戸、総門付近の石垣、本丸の石垣や見張台などもほとんど残っている。（参照：玉野の文化財）   常山千人岩 女軍の墓
御所ヶ谷神籠石 (福岡県行橋市)	「神籠石（こうごいし）」とは山中に列石や土塁、石塁で城壁を作った遺跡のことで、現在北部九州に 10 ヶ所、瀬戸内海沿いの地域に 6 ヶ所確認されている。明治 31 年（1898 年）に久留米市高良山の高良大社を囲む列石が「神籠石」として紹介されて以来、各地の類似した列石のある遺跡も神籠石と呼ばれるようになった。神聖な土地を囲む「神域」説と「山城」説で論戦が続いたが、戦後に各地の神籠石で行われた発掘調査により、列石がもともとは土塁の基礎であったことが明らかになり、現在では「山城」説が有力となっている。神籠石は「日本書紀」などに記録がないため築かれた時期ははっきりしないが、7 世紀後半に築かれた記録がある朝鮮式山城の構造と共通していることから、これらと同じ時期に築かれたと考えられている。朝鮮式山城は史書に築城年などが記載されているもので、従来、神籠石と呼び分けられていたが、近年では一括して古代山城と総称することが多い。

名 称	特 徴
	7世紀後半は、朝鮮半島の三国のうち百済と高句麗が、新羅と中国の唐の連合に滅ぼされた時代である。660年に百済が唐軍に滅ぼされ、旧百済の遺臣と倭（古代の日本）が復興軍を起こした。しかし、復興軍は663年に白村江で唐と新羅の連合軍に大敗し、倭は唐と新羅の連合軍が日本列島に攻め込むことを恐れて九州に664年に防人（さきもり）を配置し、水城（みずき）を築き、さらに665年に「大野城」「基肄城」667年に「金田城」の3城が次々と築かれた。御所ヶ谷神籠石の発掘調査でもこの時期の壺が出土している。 御所ヶ谷神籠石は、行橋市の南西、みやこ町との境となるホトギ山（御所ヶ岳）にある。下の写真は「中門」の石塁で、1300年以上の時を経てなお、高さ7mもの石積みが残っている。 「御所ヶ谷」という地名は、九州を訪れた景行天皇（12代）がこの地に行宮（仮の皇居）を設けたとの言い伝えによる。遺跡のほぼ中央の見晴らしのいい高台に、景行天皇を祀る神社がある。 古代山城は、敵軍の侵攻を監視し、妨害するために古代の官道を見張りやすい位置に築かれたとされており、御所ヶ谷神籠石北麓にも大宰府と京都平野をつなぐ古代官道が東西に走り抜けている。福岡県の瀬戸内海沿岸の古代山城はこの他、築上郡上毛町の唐原山城などが存在している。 （参照：行橋市 HP） 
臼杵石仏 （大分県臼杵市）	古園石仏大日如来像に代表される臼杵石仏（磨崖仏）は、平安時代後期から鎌倉時代にかけて彫刻されたと言われており、その規模と、数量において、また彫刻の質の高さにおいて、わが国を代表する石仏群であることから、平成7年（1995年）6月15日には磨崖仏では全国初、彫刻としても九州初の国宝に指定された。 その数は、60余体にもおよび、このうち59体が国宝となった。石仏群は4群に分かれ、地名によって、ホキ石仏第1群（堂ヶ迫石仏）、同第2群、山王山石仏、古園石仏と名づけられており、それぞれに、傑作秀作ぞろいであり、表情豊かな御仏の姿は、見る者の心にやすらぎをあたえてくれる。（参照：臼杵市 HP）  ホキ石仏  古園石仏

名 称	特 徴
熊野磨崖仏 (大分県豊後高田市)	鬼が一夜で築いたという伝説のある自然石の乱積みの険しい石段を登ると、岩壁に不動明王（8 m）と大日如来（6 m）が刻まれている。不動明王はどこか微笑んだような姿で、引き締まった表情の大日如来とともに、その神秘的な姿でやさしく出迎えてくれる。 これらは平安時代末期の作といわれており、国の史跡及び重要文化財に指定されており、鬱蒼とした山中にこれほど巨大なものを刻んだことは、当時の信仰の強さを物語っている。豊後磨崖仏の代表的なもので、日本最大級のスケールであり、約 10 年に一度行なわれる六郷満山の伝統行事である峯入りの荒行は、この不動明王の前を出発点とし、護摩を焚いて行程 150 k m、約 10 日間の行に入る。 (参照：豊後高田市 HP) 熊野磨崖仏（不動明王）
石橋群 (大分県内)	日本の石橋は、その多くが江戸時代から大正時代までに造られた。著名な石橋研究家である故山口祐造氏の『石橋は生きている』（葦書房発行）では、平成 4 年時点で、日本に残っている石橋は 1,300 基以上、うち約 1,200 基、実に 90%以上は九州にあったことが示されている。なかでも、大分、熊本の両県は、367 基、330 基と特に多く、合計で九州全体の半数以上を占めている。 石橋を造る技術は、江戸時代に中国から沖縄・長崎へ伝わったといわれており、大陸から九州へ伝わったという点では、弥生時代の稲作や鉄などと同様であるが、稲作や鉄が伝来後、全国へと広まっていったのに対し、石橋の技術は、ほとんど九州のみで発達したようである。 (参照：農林水産省九州農政局 HP、九州の風土と石橋文化) 大分県、熊本県、鹿児島県には多くの石造りの橋が残されているが、大分県で石橋が多く造られている宇佐市院内町周辺では、細かな川や深い谷が多く、大雨による橋の流出を防ぐ必要があり、橋が無ければ近隣との交流ができないなどの地理的な要因と、阿蘇山の噴火で形成された溶結凝灰岩が多く産出したこと、石工が多く存在していたことから、多くの石橋が作られたといわれている。(参照：宇佐市 HP) 日本最長の石橋（耶馬溪橋、大分県中津市）

名 称	特 徴
	 鳥居橋（大分県宇佐市）  一の橋（大分県宇佐市）  御沓橋（大分県宇佐市）  念仏橋（大分県宇佐市）
不老橋 (和歌山県和歌山市)	不老橋は、片男波松原にあった東照宮御旅所の移築に際して紀州藩 10 代藩主であった徳川治宝（橋が架けられた当時は 13 代藩主徳川慶福の治世中）の命により、嘉永 3 年（1850 年）に着工し、翌 4 年（1851 年）に完成したアーチ型の石橋である。この橋は、徳川家康を祀る東照宮の祭礼である和歌祭の時に、徳川家や東照宮関係の人々が新御旅所に向かうために通行した「お成り道」に架けられたものである。 橋台のアーチ部分については肥後熊本の石工集団の施工であり、勾欄部分については湯浅の石工石屋忠兵衛の製作と推定されている。勾欄部分には、雲を文様化したレリーフがみられる。 江戸時代のアーチ型石橋は、九州地方以外では大変珍しく、特に勾欄部分の彫刻が優れている。 不老橋は、平成 7 年（1995 年）に和歌山市指定文化財建造物に指定されている。 （参照：和歌山市観光協会 HP） 

名 称	特 徴
砲台跡 (兵庫県他)	江戸末期には開国に向けて、海外から多くの船が日本に来るようになり、沿岸部の防衛を行うため、江戸幕府は瀬戸内海の和田岬、川崎(湊川)、西宮、今津(いずれも兵庫県)に砲台を設置した。砲台の外部は、花崗岩、内部は木材で2階建ての構造で作られている。現在、当時の状況で保存されているのは、和田岬砲台(兵庫県史跡)となっている。 和田岬砲台(兵庫県神戸市) 明治維新の後、明治政府は外国人から軍制の指導を受け、新たな砲台づくりを進めた。建設場所は、東京湾、対馬、下関、由良で、日清戦争を契機に、広島湾、芸予、佐世保、舞鶴、長崎、函館要塞の建設が進んだ。強固な構造を保つために、瀬戸内海で建造された要塞(砲台、兵舎、弾薬庫など)には、花崗岩が多く用いられている。 芸予要塞砲台跡(愛媛県今治市) 三高山砲台跡(広島県江田島市)

名 称	特 徴
	和歌山市友ヶ島の一つ沖ノ島には、砲台跡が点在している。明治政府により「由良要塞」として整備され、第二次世界大戦までの間は、一般の人々が島に近づくことは許されなかった。現在も、レンガ造りの砲台跡や日本で8番目に出来た洋式灯台（明治5年竣工）が残り、戦前の様子が偲ばれる。 （参照：和歌山県フォト博物館 HP） 
水軒(すいけん)堤防 (和歌山県和歌山市)	紀の川の南岸の西浜に築かれた南北約 1.0km に及ぶ江戸時代の堤防跡。明治及び昭和の文献資料により、紀州藩初代藩主徳川頼宣の命を受け、寛永年間（1624～1644 年）に朝比奈段右衛門が工事を担当し、13 年の歳月をかけ完成したものとされていたが、その後の道路拡張に伴う発掘調査により、18 世紀後半の築造であったことが判明した。また、堤の北端部・南端部の確認調査により、堤防は海側に石堤、陸側に土堤を併せもつ非常に強固な構造体であり、高さは石堤が約 4m、土堤が約 5m で、基底部の幅は推定で 24m 以上にも及ぶことが考えられる。 築造の背景として、堤防東部の地域が、古代以来の名勝である和歌の浦と一体となった「吹上」の地であり、藩主が遊覧したり別邸を築いたりした西浜の地であることから、防潮とともに景観保持の目的であった可能性も想定されている。なお、道路拡張時の発掘調査により確認された石堤は、上部の 6 段まで（全体で 16 段のうち）が、南海水軒線の水軒駅跡地の水軒公園に移築保存されている。 昭和 3 4 年（1959 年）和歌山県指定文化財史跡に指定されている。 （参照：和歌山市の文化財 HP） 

名 称	特 徴
大多府（おおたふ） 漁港元禄防波堤 （岡山県備前市）	大多府島は、元禄 11 年（1698 年）に岡山藩によって港が置かれ、諸藩の参勤交代の寄港地として賑わった。 大多府漁港に残る元禄防波堤は、現存する数少ない明治以前の港湾施設で、300 年以上経過した今もなお現役で活躍し、島の人々の生活に根付いた役割を果たしている。防波堤は、岡山藩の土木技術者・津田永忠の指揮のもと、石工河内屋治兵衛によるものと推定され、二段に石を組んだ直立式石積の構造に、優美な三次元曲面（かまぼこ型）を有し、合端（石と石の接合部の表側に近い部分）は密着して藩校として建造された閑谷学校の石塀と同様、頑丈で美しい外観を呈している。 （参照：国土交通省 HP） 
保久良神社（灘の一つ火） （兵庫県神戸市）	社頭の石燈籠は「灘の一つ火」と呼ばれ、古くは眼下の海を往来する船の目印として、灯台の役目を果たしてきた。昔は毎夜、麓の村の人たち（北畑天王講）が牛乳ビンなどに油を入れて訪れ、輪番で火を絶やさぬよう守っていたそうである。 （参照：神戸市 HP） 

名 称	特 徴
鍋島灯台 (香川県坂出市)	瀬戸大橋直下の与島に隣接する小さな無人島が鍋島であり、この島の頂に鍋島灯台がある。本灯台は、当時のイギリス商務省から推薦されたイギリス人技術者リチャード・ヘンリー・ブラントンにより建設されたもので明治 5 年（1872 年）11 月 15 日に完成している。明治期において、瀬戸内海には、外国人技師の指導で 8 基の洋式灯台が建設されたが、鍋島灯台は白御影石を使った石造り灯台であり、今なお現存し海の安全を守っている。また、鍋島灯台は文化遺産としても高い評価を受けており、経済産業省による「近代化産業遺産群」として認定されている。 （参照：高松海上保安部ＨＰ） 同時期に建設された石造の灯台として、江崎灯台（兵庫県淡路市）、釣島灯台（愛媛県松山市）、部埼灯台（福岡県北九州市）などがある。 瀬戸大橋と鍋島灯台

名 称	特 徴
採石場	瀬戸内海における石垣作りは7世紀後半に朝鮮半島における百済滅亡の時期から始まるといわれている。唐、新羅軍が日本に攻めてくることを想定し百済の技術者により朝鮮式山城が築かれた時に、日本初の城の石垣が誕生した。その後、元寇の時期に鎌倉幕府は、博多湾沿岸に「石築地（いしつじ）」と呼ばれる石垣堤防を作らせた。本格的に城の石垣が作られ始めたのは安土桃山時代以降で、織田信長が滋賀県にいた石工職人の穴太衆（あのをしゅう）に安土城を作らせたことから支配地に石垣作りの城が作られ始めた。豊臣秀吉が築城し徳川家康が再興した大坂城の石垣が日本最大のものとされている。また、西日本の城に石垣が備わっているのに比べて、東日本の城には小規模の石垣が見られるに過ぎない。この石垣に用いられた石材は、ほとんどが花崗岩でできており、固くて丈夫なので、城の土台としての石垣に最適であった。 現在の大坂城の石垣 大阪城最大の石（蛸石）

名 称	特 徴
	近代においても石材の用途は建築資材として活用されてきており、北木石は日本銀行本店、靖国神社鳥居、明治生命本社などに、国会議事堂の建設に倉橋島、黒髪島の石が使用されている。 花崗岩は瀬戸内海沿岸各地から大量に入手でき、海路を利用して運ぶことができたので、陸域よりも島嶼部で盛んに採掘されてきた。主な採石場としては、兵庫県姫路市の男鹿島、西島、香川県の小豆島、豊島、与島、小与島、櫃石島、広島、岡山県の犬島、白石島、北木島、愛媛県の伯方島、大三島、大島、広島県の江田島、倉橋島、山口県の浮島、大津島、黒髪島などがある。 兵庫県家島（男鹿島）の採石場 大島石採石場（愛媛県今治市） 北木島採石場（岡山県笠岡市）



瀬戸内海における主な石の史跡